

ペール・ラーゲルクヴィストの『巫女』における“まなざし”

スウェーデン語専攻 藤原翠

目次

1. はじめに
2. 作者紹介
3. 作品紹介
 - 3.1. 作品概要
 - 3.2. あらすじ
4. 目の描写
 - 4.1. アハスヴェルス
 - 4.2. 巫女
 - 4.3. アハスヴェルスと巫女の比較
5. 巫女のまなざしに見る，自己への関わり
 - 5.1. 視線の移り変わり
 - 5.2. 視線の交わり
6. まとめ

使用テキスト

参考文献

インターネットの資料

本稿は、ペール・ラーゲルクヴィストの『巫女』*Sibyllan* (1956)を登場人物の「まなざし」に注目して分析し、作品を実存主義的な観点から読み解こうとするものである。『巫女』は、人間にとっての神という存在や人生の意味について疑問を投げかける中編小説である。「神を見た」二人が主要登場人物である本作品には示唆的な「まなざし」の描写や「視線」のやりとりが登場する。しかし、本作品は宗教的な観点や神話的な観点からの分析、伝記的批評などの多様な批評がなされているにもかかわらず、「まなざし」に焦点を置いた批評はこれまでになされていない。よって本作品を「目」に着目して読み解くことは、今までの批評にはなかった視点を補うことができるだろう。また様々な神話や宗教のイメージが取り入れられている『巫女』は、同時期に発表されたラーゲルクヴィストの他作品と比べてキリスト教のイメージに直結するところが少ない。よって人間の普遍的な問題をより直截的に扱っている作品とも捉えられる。本稿は「まなざし」という新たな切り口と実存主義的な観点からの考察を通して、特定の宗教に限らない信仰という大きなテーマに対するラーゲルクヴィストの考えに迫ることを目的とする。

第一章では、研究意義や本稿の構成について述べた。第二章では作者を紹介し、第三章では、ラーゲルクヴィストの他作品との関連や今までなされてきた批評を紹介するとともに、あらすじを説明した。第四章では、心情をあらわにする部位である「目」の描写を分析することで、神を見たことにより巫女とアハスヴェルスの内面にどのような変化がもたらされているのかを考察した。本作には、神を見た者の証として印象的な表現が用いられている目の描写が散見される。アハスヴェルスと巫女の目は神との邂逅をきっかけに空虚さを示すようになった後、神を示唆するものに満たされている様子を見せるようになる。それらの目の描写は二人の心の状態を映し出していると考えられる。すなわち、アハスヴェルスと巫女は両者とも、神を見ることで空虚感や虚脱感に見舞われた後、神と結びついた絶望や不安によって心を満たされ、神と再び繋がることを感じるのである。神との邂逅を境に心の持ちようが変化し、実存的な問いに立ち向かっていく過程に二

人の共通点が見られた。その一方で、アハスヴェルスと巫女は神と自己の関係に対して異なった見解を持っていることがわかった。自己自身の根拠を神のうちに見出すか否かが信仰か絶望かの分岐点になるというキェルケゴールの考えを引用した上で、神と自己との関係の捉え方の違いが二人の目の豊かさの違いにつながっていると述べた。

第五章では、神の存在と巫女の自己探求がどのように交錯しているのかを巫女のまなざしに注目して分析することで、巫女が「豊か」な目を持つに至った経緯を明らかにすることを試みる。第一に、アハスヴェルスと出会う以前の巫女のまなざしの移り変わりを分析した。巫女は、神との関わりをきっかけに世俗から隔絶されていき、自己へ視線を移して内省した。とりわけ、神のまなざしに遭っている瞬間に、巫女は果てしない孤独や避けられない苦悩に対峙し、己の限界に直面したと考えられる。その瞬間において巫女の視界は遮断される。視界の遮断は巫女を極限状態にし、自己と直面することのできる状況を作っていると考察した。第二に、アハスヴェルスと出会ったことによって生じた視線の交わりを分析した。神を見た二人の視線の交わりは、二人が孤独であること、二人が同一の水準に立っていること、二人が「歴史的意識」を持っていること、超越的な存在が介在しているということ、という四点に特徴付けられる。これによって、二人の視線の交わりをヤスパーズなどの実存主義者が呈する「実存的な交わり」と見なすことができる可能性を示した。

第六章では、以上の分析から『巫女』を実存主義的な観点から読み解くことが可能であるとした上で、ラーゲルクヴィストは本作において主体性を持つ人間と神との強い結びつきに焦点を当てていると結論づけた。巫女とアハスヴェルスは神と強力な結びつきを持っていることが示されている。この二人は実存として主体的に生きる人間を象徴していると言えることから、ラーゲルクヴィストは『巫女』を通して、実存として生きる全ての人間にとっても神という存在は人生から切っても切り離せぬ存在であることを示しているのではないかと考えられる。また、その人間と神のつながりは人間の主体性を前提にしているものであることが窺える。特定の宗教

や神話の性質を超えた、人間のより根源的で普遍的な信仰は、人間の主体性の先に見出せるのだというメッセージを受け取ることができるだろう。人生に対する普遍的な問いを、読者の信仰の有無にかかわらず平等に投げかける『巫女』は、宗教を持たない者が多い現代日本においても一読する価値のある作品である。